

あるワーカホリックのワークライフバランス

片岡 葉子

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪はびきの医療センター皮膚科主任部長

現在の私は年に1回、夏季休暇を1週間として海外の景勝地でハイキングをすること以外は、ワーカホリックに近い。約20年前、子育てをしながら勤務をしていたころのワークライフバランスを思い出してみたい。

20数年前、7歳、3歳、0歳の3人の子連れで現在の勤務先に赴任した。着任初日から60名を超える外来予約が入っており、6割以上がアトピー性皮膚炎(AD)患者で占められる超多忙な病院であった。当時は脱ステロイド真っ最中の時代で、数多くの治らない患者の話を傾聴し、不登校・引きこもり・抑うつとの相関を指摘するようになった。いま思えば薬を使わないことが究極の目標で、医療の方向性を見誤っていた時代であった。大きな転換点となったのは、2008年に保険適用となった血清TARCの登場である。数多くの異常高値のデータを見る中で、自らの治療の不備で数多くの患者を長期間苦しめていたことを猛省し、戦略的な治療“タイトコントロール”を提唱するに至った。

その後の10年間は自説の正当性を確信していたが、医師からの援護は少なく、苦労が多かった。支えてくれたのはコメディカル、患者であった。元来、患者はもっとよくなりたいと思っていたわけで、その意志と私の戦略が一致することで方向づけは容易であり、集団教育を利用することで時間の問題はクリアできた。また患者が良好なアウトカムを出してくれることで私の治療戦略もより強化され、前進した。半面、医師の意識を変えることはもっとも困難であった。ADは自然に治るという楽観論、あるいはどうせ治らないという悲観論を打ち破り、適切な薬物療法で症状のない状態を維持することが略治に向かうための近道であることを、企業共催の会で講演の機会をいただき説いて回った。



この間、私の原動力となったのは、自分が担当する疾患で数多くの患者が困っていることは許せない、なんとかしたいという意志であり、それは母性的感性といえるかもしれない。自宅では子供たちとのわずかな時間の共有が日々のリフレッシュであった。就寝前、絵本を読み聞かせ、子供たちのユニークな反応に笑い、ときに1時間だけ休暇をとって参観日に参加することも、ささやかな楽しみであった。

現在AD診療は新規治療薬の開発が進み、大きく前進しつつある。しかし、慢性の多因子疾患である本症には、治療戦略が必須である。既存治療を突き詰めてきた臨床医であるからこそ、新規治療薬の意義と位置づけがよくわかる。現役引退までの向こう数年間、治療戦略の青写真作成に参画できることは幸運であり、それに日夜打ち込むことこそが私にとって理想的なワークライフバランスかもしれない。